ぽけっとすとーりー　～小さな国の、小さな小さな物語～

　チャンスを伺っては、水面から顔を出すゼニガメ。だが、いずれもイトマルの攻撃がドンピシャのタイミングで顔面を襲って来るので、未だにゼニガメは川の中を泳いでいた。いっそ岸に上がることも考えたが、すぐに思いとどまる。無策で出たら最後、一方的にイトマルに攻撃されると思ったからだ。

　だが同時に、このまま泳ぐのもまずいとゼニガメは思う。断ち切れない糸が、だんだんとゼニガメの肢体に絡みつき、動かしづらくなってきたのだ。今は大丈夫でも、その内泳げなくなることは明白だった。水中には攻撃が届かないとは言え、泳げなくなれば水中にとどまる事は出来ない。あの『ミサイル針』が、ゼニガメを襲うだろう。動けなくなった状態で、その攻撃を防げる自信など、ゼニガメには無かった。

　取り敢えずゼニガメは、イトマルに攻撃するチャンスを伺うより先に、この糸をなんとかしようと、体に絡みつく糸に噛み付く。先程『こうそくスピン』でこの糸を断ち切ろうとしたが失敗したので、今度は歯で噛み切ろうと考えたのだ。だが、現実は上手くいかず、ゼニガメの口の中はあっという間に糸で粘ついた。

　完全にお手上げになってしまい、天を仰ぐゼニガメ。いや、この場合は『水面を仰いだ』というべきか。せめて何か尖っているものがあれば良かったのだが、生憎そんなものは無い。だが、そんなゼニガメの目に、あるものが飛び込んできた。

　それは、一本の糸だった。糸の続いている先を見ると、自分の体に続いている。触ってみると、その糸は自分の体にまとわりついている糸と同じものだった。ここでゼニガメは、イトマルがどのようにして自分の位置を特定していたのかを悟る。イトマルは、ゼニガメにまとわりついた糸のある方向に攻撃を仕掛けていたのだ。水面に出てくるタイミングは、糸の張りの強弱で判断していたのだろう。まるで、釣りのように。

　しかし、それが分かったからと言って、ゼニガメにはどう攻略することも出来ない。岩に糸を引っ掛ける方法もゼニガメは考えたが、すぐにその案は却下した。水中の様子は分かり辛いとはいえ、障害物の位置なら何とか分からなくもない程度には澄んでいるのだ。そのような作戦、岩に糸を巻きつけた時点で、相手に警戒されてしまう。イトマルからは、糸の先が水中の障害物の後ろ辺りで止まっているようにしか見えないだろうが、よもやゼニガメが岩の後ろに隠れているとは思うまい。すぐに、狙いに気づかれてしまうだろう。

　途方に暮れかけたゼニガメだったが、その時ふと気づく。その場で動きを止め、顎に手を当てて目を瞑った。

　暫くそうしていたゼニガメだったが、途端、パチッと目を開いて、猛スピードで水面へと浮上する。そんな事をすれば、イトマルの『ミサイル針』が飛んでくるにも関わらず。

　当然、外に飛び出たゼニガメを待っていたのは、無数の小さな針だった。さっきまでなら、すぐにゼニガメは水中に身を潜めただろう。だが、今回はその攻撃に対して、ゼニガメは顔のみならず、全身を晒すかのように、水の外へと飛び出ていた。空中に身を投げているので、ゼニガメは『ミサイル針』を躱すことなど出来るはずもない。あっという間に、ゼニガメの甲羅や手足に無数の針が容赦なく突き刺さる。

「ゼ……ゼニガメっ？」

　チクチクと刺す痛みに耐えるゼニガメは、雅也の声を聞きながら、そのまま口を大きく開く。刹那、大量の水がイトマル目掛けて発射された。今までより高い位置に顔を出していたため、顔面には針の攻撃が届かなかったのだ。攻撃するための、捨て身の戦法だ。攻撃を続けていたイトマルは、ゼニガメの『水鉄砲』に対して反応が遅れる。イトマルが水を被るのと、ゼニガメが水の中に落ちるのと、ほぼ同時だった。

「イトマル、落ち着け！」

　水をかけられたのが、よほど予想外だったのか、自身の顔を前足でしきりに擦っていた。そんな事をしていては、次に来るであろう攻撃に対処出来ないのは明白。まさかさっきの攻撃でゼニガメがやられたとは神楽は思っていないので、大声でそう叫んだ。

　それを聞いて、一瞬ビクッと体を強ばらせたイトマル。だが、自身の作戦を思い出し、再び水中に続く糸を見つめた。イトマルも主人と同様、ゼニガメはまだ戦えると思っている。それでも、この作戦を続けていれば、いつかはゼニガメを気絶へと追い込めるだろう。さっきのように捨て身の攻撃を仕掛けられても、先に体力が無くなるのはゼニガメの方だと思っていたのだ。神楽もそれを信じて疑わず、糸の先に素早く目を走らせる。

　だが、神楽達のその考えは、実は間違っていた。

　雅也も神楽に続いて糸の先を見るが、その瞬間、この場で雅也だけが、ゼニガメの真の目的を知った。そして知った刹那、ゼニガメが水中から顔を出す。

　しかしその場所は、神楽とイトマルが予想していたような、糸の先では無く、その糸よりもずっと手前の所だった。

「なっ……？」

　驚きの声を上げる神楽。神楽が回避の指示を出すより早くゼニガメは再び口を大きく開き、糸の力で空中に浮遊している、イトマルの丁度お腹の辺り目掛けて、勢いよく水を吐いた。神楽の驚きの声で、初めてイトマルはゼニガメが水中から顔を出していたことに気がついたため、当然自主的にそれを躱すことなど出来ない。無抵抗のまま『水鉄砲』は直撃し、イトマルは自身が乗っかっていた糸から転落して、地面に仰向けに落っこちた。

「ゼニガメ、うまいっ！」

　雅也は賞賛の声を上げる。捨て身の攻撃だと思われていた、さっきのゼニガメの攻撃は、実はそういった目的では無かった。真の目的は、自身にまとわりついていた糸、及びイトマルへと続いていた糸を、イトマルの『ミサイル針』で断ち切るためだったのだ。見事にその作戦は成功し、イトマルへと続く糸は完全に断たれた。イトマルに『水鉄砲』を撃ったのは、それを気づかせないためのカモフラージュである。

　運良くその作戦が一発で成功したことにホッと胸を撫で下ろしながらも、岸に上がったゼニガメは水を纏って頭と両手両足を甲羅の中へと引っ込める。まだ少し糸は体に巻き付いているものの、今までよりはずっとマシに動けた。そして、相手のイトマルはひっくり返って身動きが取れず、完全に無防備な状態。待ってましたとばかりに雅也がイトマルに指を向け、叫ぶ。

「ゼニガメ、アクアジェット！」

　こんなチャンスは、恐らくもう二度と来ないだろうと、ゼニガメは感じていた。確実に、この一撃はクリーンヒットさせなければならない。そう思ったゼニガメは、慎重に、それでいて猛スピードで、さらに真っ直ぐ最短距離で、イトマルへと突進していく。

　渾身の一撃が、イトマルに命中した。